

神通川水系熊野川におけるサクラマス稚魚の放流効果 ～春放流と夏放流の比較～

内水面課 研究員 古川 嵩恭

1 背景・ねらい

神通川をはじめとする県内河川では、サクラマスの漁獲量は減少しており、近年では人工ふ化放流に用いる増殖用親魚の確保が困難なほど危機的な状況である。資源増大のため、稚魚放流を長年実施しているが、資源の回復は見られず、効果的な放流手法の確立が課題となっている。

サクラマス漁獲量減少の主要因に、ダム等の建設によるサクラマス親魚の遡上・生息範囲の著しい減少がある（田子，1999）。また、遡上可能範囲内でも、堰堤等の構造物によって、遡上障害となっている箇所が存在する。このため、過去にサクラマスの遡上があった遡上障害堰堤の上流部には、降海型サクラマス（ヤマメ）はほぼ生息していないが、生息に適した河川環境は残されていると考えられ、放流適地として活用できる可能性がある。

県内ではサクラマス当歳魚の春・夏・秋放流と1歳魚の春スマルト放流が実施されている。スマルト放流では放流効果が高い反面、高コストという欠点があり、早期の放流はその逆の傾向がある。その中間となる夏放流については、放流効果が不明である。

これらのことから、遡上障害堰堤上流部においてサクラマス当歳魚の標識放流を春と夏に実施することで、放流適地としての活用の検討と春放流・夏放流の効果を比較した。

2 概要

令和5年4月（春放流）に神通川支流の熊野川上流部において無標識魚を2,500尾、7月（夏放流）には耳石標識魚を29,000尾、計31,500尾を放流した。放流地点およびその下流約1.5km地点の計2地点において、電気ショッカーによる採捕調査を実施したところ、夏放流魚が放流地点付近で定着していることを確認した（図1）。

令和6年4月（春放流）に耳石標識魚を10,000尾および無標識魚を5,000尾、7月（夏放流）に脂鱗切除魚を6,000尾、計21,000尾の稚魚を放流し、放流地点、放流地点下流0mおよび下流約1.5km地点の計3地点において採捕調査を実施した。春放流魚が放流地点付近で定着していることを確認したが、夏放流魚は春放流魚より体サイズが大きかったにも関わらず、全地点でほとんど確認されなかった（図2）。

このことから、放流魚の定着条件は体サイズよりも先住効果が優先されるものと考えられる。サクラマス親魚の遡上が阻害されている上流部や、先住魚が少ない区域での放流は、放流の時期を問わず一定の効果があると考えられる。

3 問い合わせ先

富山県農林水産総合技術センター水産研究所 内水面課

担当：古川 嵩恭

TEL 076-475-0036

(参考) 具体的データ

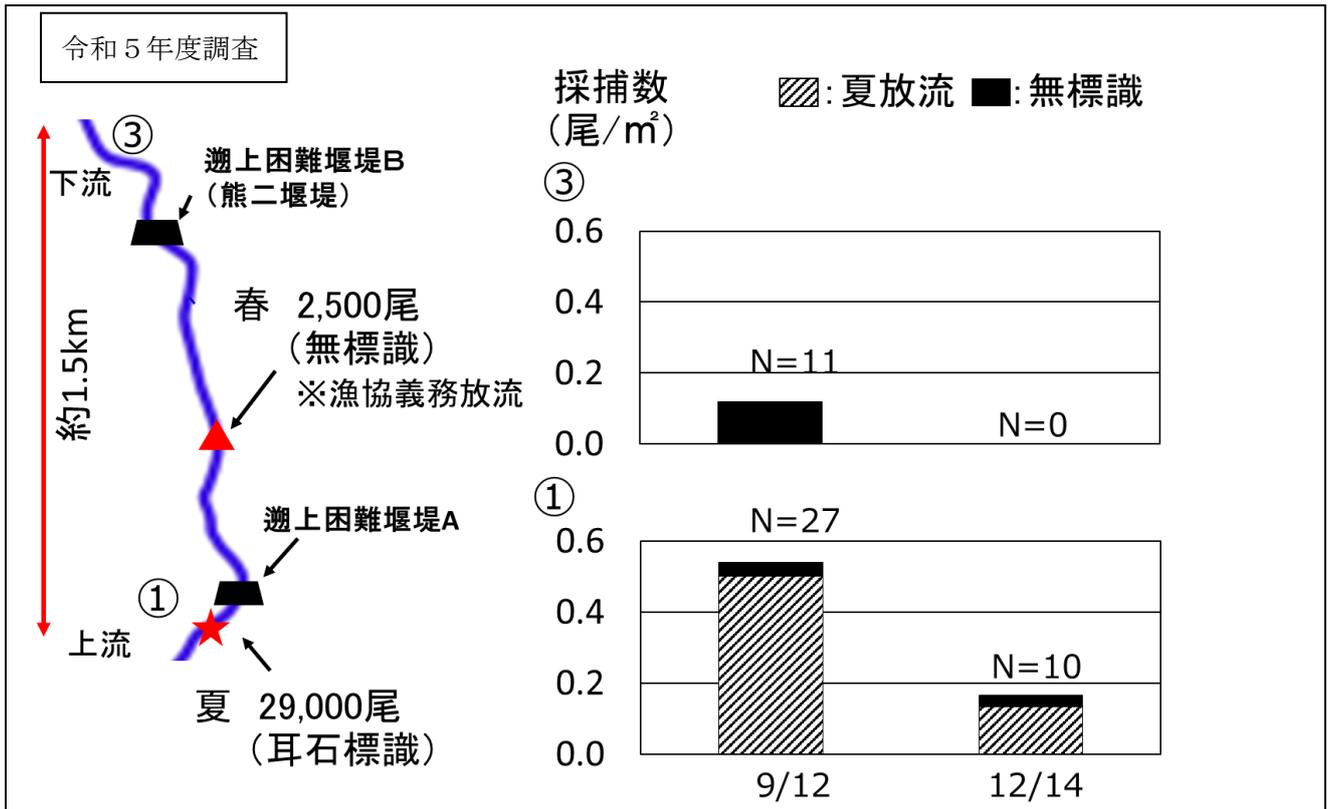


図1 令和5年度調査の放流地点、サクラマス稚魚の採捕数および放流時期別組成

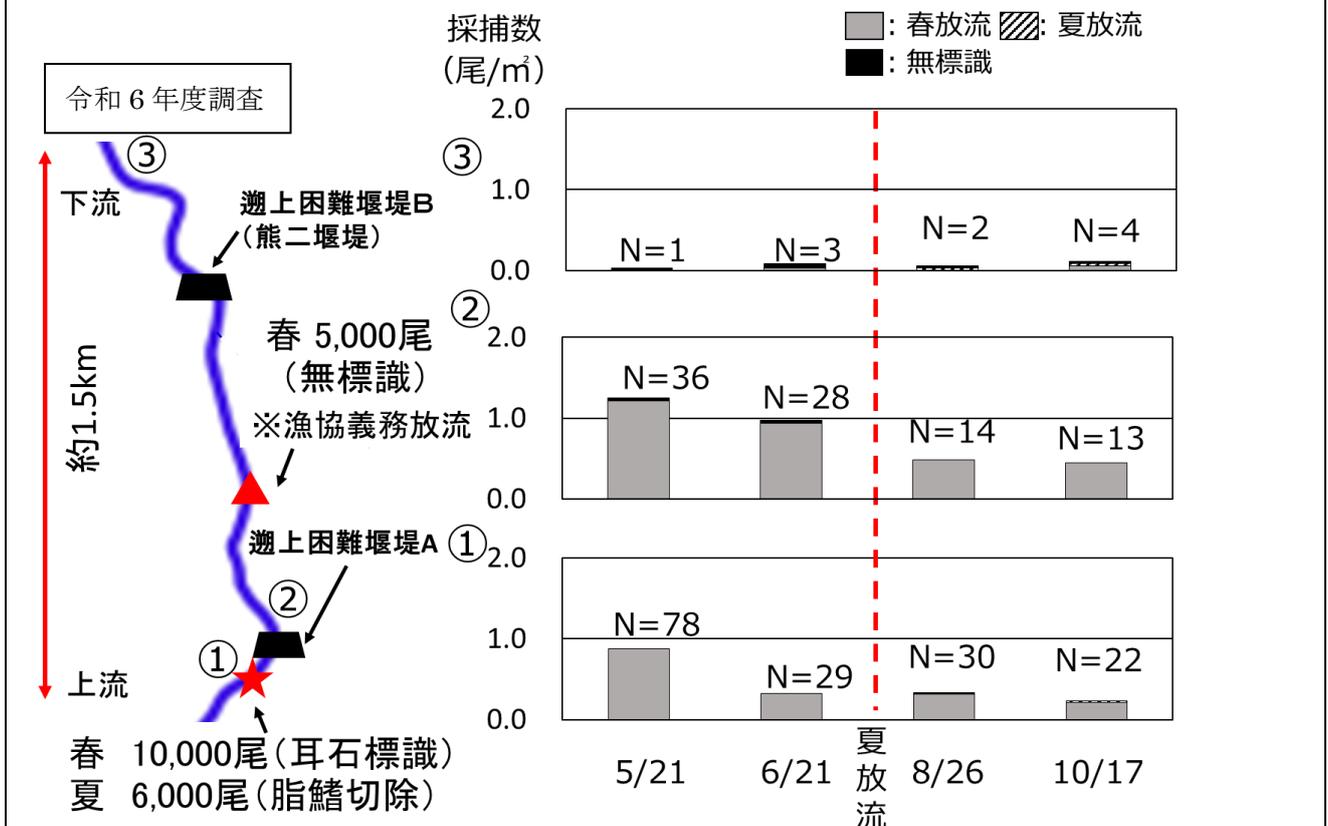


図2 令和6年度調査の放流地点、サクラマス稚魚の採捕数および放流時期別組成